



# 大好き かたびら

<http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/katabira>

横浜市立帷子小学校  
学校だよりNo.5 9月号  
令和4年8月29日  
横浜市保土ヶ谷区  
川辺町65-1  
TEL 045-335-5896

## 「思いやり」の形

きょうむしゅにん くろき ちから  
教務主任 黒木 力

きつそく わたし たいげん  
早速ですが、私が体験したあるエピソードを紹介します。

とある休日、私は家族と買い物に来ていました。私は少し疲れたのでベンチに座って休んでいました。すると、ある男の子とそのお母さんが向こうから歩いてくるのが見えました。男の子は最近歩き始めたくらいの年齢で、大切そうにおもちゃを抱えながら一生懸命歩いている様子でした。そのときです。

バタン。

男の子が転んでしまったのです。そして、おもちゃが私の方まで転がってきました。私とおもちゃの距離およそ3メートル。ベンチから立ち上がり、手を伸ばせば届く距離です。すぐさま、私は拾ってあげようと腰を浮かそうとしました。そのとき、

「〇〇くん、大丈夫？おもちゃ、自分で拾おうね。」

というお母さんの声が聞こえてきました。私は拾ってあげようかどうか迷ってしまいました。

さて、このエピソードを読んで、皆さんはどのような考えをもったのでしょうか。「自分だったらこうするな。」や「黒木先生は拾ってあげなかったから、冷たいな。」などと思った人もいるかもしれません。

道徳科の授業などで、よく子どもたちから出てくる言葉があります。それは、「相手の気持ちを考える」です。この言葉自体を否定するつもりはありません。ただ、「相手の気持ちを考える」とは具体的にどういったことなのでしょう。この言葉が、言っただけで満足する「使い勝手のよい言葉」になってしまっただけではもったいないと常々思っていました。

7月に4年生の学級をお借りして、道徳科の「親切、思いやり」の授業をしました。学習課題は「相手の気持ちを考えてとはどういうことだろう」。4年生の学年目標の一節に「相手の気持ちを考えて」とあるので、ここをきっかけに授業を展開しました。両学級とも活発な意見が出て、昨年度担任した者としてはうれしい限り。その授業でまとまったことは次の通りです。

相手の気持ちを考えるとは、

- 相手を気遣い、自分の行動で相手がどう思うか考えること。
- しつこく接したりせずに、相手のためにそっとしておくこともあること。

「相手の気持ちを考える」＝「手伝う、助ける」とすぐになりがちですが、それ以外にも思いやりの形はあるということに気付いたようです。授業の後半では、このことを踏まえた子どもたち自身の体験や考えをたくさん聞くことができました。

「相手の気持ちを考えるとはこうだ」、「思いやりとはこれだ」という正解は一つではありません。また、人

それぞれ<sup>かんが</sup> <sup>かた</sup> <sup>ちが</sup> 考え方も違うでしょう。それでも、共通<sup>きょうつう</sup>しているのは「ひとりよがりではなく、そこに相手<sup>あいて</sup>がいること」であり、「自分<sup>じぶん</sup>も相手<sup>あいて</sup>も心<sup>こころ</sup>が温<sup>あたた</sup>かくなること」だと思<sup>おも</sup>います。

ふだんの子<sup>こ</sup>どもたちの考<sup>かんが</sup>えや行<sup>こう</sup>動<sup>どう</sup>から「思<sup>おも</sup>いやり」の心<sup>こころ</sup>は見<sup>み</sup>て取<sup>と</sup>れます。ただ、それが思<sup>おも</sup>いやりであることやそこから感<sup>かん</sup>じ得<sup>え</sup>る心<sup>こころ</sup>の温<sup>あたた</sup>かさなどは、本<sup>ほん</sup>人<sup>にん</sup>たちは実<sup>じつ</sup>感<sup>かん</sup>として得<sup>え</sup>ていないかもしれませ<sup>せ</sup>ん。そのよ<sup>よ</sup>うな子<sup>こ</sup>どもたちの姿<sup>すがた</sup>をつかみ、褒<sup>ほ</sup>めたり、伝<sup>つた</sup>えたりしていくことも教<sup>きょう</sup>師<sup>し</sup>の役<sup>やく</sup>割<sup>わり</sup>なのだと痛<sup>つう</sup>感<sup>かん</sup>しています。

最<sup>さい</sup>後<sup>ご</sup>に、冒<sup>ぼう</sup>頭<sup>とう</sup>のエピソ<sup>え</sup>ードの続<sup>つづ</sup>きを紹<sup>しょう</sup>介<sup>かい</sup>します。

お母<sup>かあ</sup>さんの声<sup>こゑ</sup>を聞<sup>き</sup>いた男<sup>おとこ</sup>の子<sup>こ</sup>は、す<sup>す</sup>ぐに立<sup>た</sup>ち上<sup>あ</sup>がりました。おぼつかない足<sup>あし</sup>取<sup>と</sup>りでしたが、おも<sup>おも</sup>ちゃを自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>で拾<sup>ひろ</sup>うことができた<sup>でき</sup>ました。

「〇〇くん、えらいね！ がんばったね！」

お母<sup>かあ</sup>さんは、男<sup>おとこ</sup>の子<sup>こ</sup>をうんと褒<sup>ほ</sup>め、だ<sup>だ</sup>っこしてあ<sup>あ</sup>げていました。

男<sup>おとこ</sup>の子<sup>こ</sup>のとびっ<sup>え</sup>きりの笑<sup>え</sup>顔<sup>が</sup>を見<sup>み</sup>ることができ、私<sup>わたし</sup>も心<sup>こころ</sup>が温<sup>あたた</sup>かくなりました。